

一般社団法人日本森林学会 2016(平成28)年度事業報告

(1)「日本森林学会誌」の発行:2016年4月(第98巻第2号),6月(同3号),8月(同4号),10月(同5号),12月(同6号)および2017年2月(第99巻第1号)の年6回発行し,科学技術振興機構のJ-STAGEで公開した。論文29編,短報8編,総説1編,その他(巻頭言・書評・研究資料)3編および学会記事を掲載し,総計318ページとなった。ページ数は昨年度に比べて約30%増であった。第99巻第1号より,表紙写真を変更した。また,第99巻に掲載予定の特集企画案の募集を行った。

(2)「Journal of Forest Research」の発行:2016年4月(Vol. 21 No. 2),6月(No. 3),8月(No. 4),10月(No. 5),12月(No. 6)および2017年2月(Vol. 22 No. 1)の年6回発行した。特集“Climate change – mitigation, impacts and adaptation in the forestry sector”を含めたOriginal Article 33編,Short Communication 11編を掲載した。総ページ数は396ページとなり,昨年度に比べて1.2倍に増加した。出版社が2017年2月発行の22巻よりSpringer Japan社からTaylor & Francis社へ変更した。それに伴い出版社との契約を取り交わし,投稿規定や内規等の変更をおこなった。また,表紙デザインをリニューアルするとともに,冊子のサイズをA4版に変更した。Ecological research(ER)との合同特集号(Virtual Issue)“Ecological aspects of management of overabundant deer populations”を発行した。電子版の周知を図るため,メールマガジンを用いて会員に発行を知らせるとともに,日林誌と学会ウェブサイトで発表論文の日本語書誌情報を掲載した。2015年のImpact Factorは0.929で,2014年(0.775)より上昇した。2015年の5-year Impact Factorは1.121であった。

(3)「森林科学」の発行:2016年6月(77号),10月(78号),2017年2月(79号)の年3回発行した。特集「森林土壌—国際土壌年 2015 を記念して—」「林業労働者のいま」「シカによる影響を低減するための最新知見と課題」をはじめ,シリーズ「森めぐり」「現場の要請を受けての研究」「うごく森」「森をはかる」「林業遺産」等,総計162ページを掲載した。79号よりJFRの冊子サイズ変更に合わせて,冊子のサイズをA4版に変更した。77号よりオンライン公開における会員限定閲覧期間を2年から1年に変更した。また,オンラインバックナンバーについて,J-Stage公開に向けて準備を進めた。

(4)「日本森林学会メールマガジン」の発行:第70号(2016年3月)～第81号(2017年2月)を発行した。

(5)ウェブサイトの更新:ウェブサイト更新を随時行い,最新情報を掲載した。大会や表彰をはじめとする各種の学会情報を会員に発信するとともに,学会刊行物などの学会活動について随時発信・広報した。大会発表申し込みおよび発表要旨集のオンライン入稿を支援した。大会ページの視認性・わかりやすさを高めた。その他,研究集会・シンポジウムや公募等の関連情報を提供・広報した。

(6)第127回日本森林学会大会の開催:関東森林学会の推薦により,神奈川県藤沢市(日本大学生物資源科学部)で開催した(2016年3月27～30日;大会運営委員長:井上公基会員,日本大学)。研究発表は総計857件で,内訳は部門別口頭発表171件,部門別ポスター発表472件,公募セッション口頭発表86件,公募セッションポスター発表35件,企画シンポジウム口頭発表93件であった。中等教育連携推進委員会により高校生ポスター発表を併催した。公開シンポジウム「潤いのある都市をつくる森

林」を、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて開催した。学会企画として、「和文の論文執筆や審査の経験を共有しよう—投稿原稿、審査に対する回答書、そして査読レポートの書き方を中心に一」、「大学院生のための申請書作成指南—学術振興会の特別研究員(DC1~PD)の応募手法—」および「森林・林業分野職業研究会」を開催した。「第127回日本森林学会学術講演集」を発行した。

(6) 第128回日本森林学会大会の開催準備:九州森林学会の推薦により、鹿児島大学郡元キャンパスおよびかごしま県民交流センター(鹿児島市)での開催を準備した(2017年3月26~29日;大会運営委員長:曾根晃一会員,鹿児島大学)。2016年5月19日に大会運営委員会引継会議を実施した。公募セッションと企画シンポジウムを会員から公募し、それぞれ10件を採択,13の部門別口頭・ポスター発表とともにウェブ登録システムによって研究発表申込を受け付けた。第4回高校生ポスター発表を企画し,全国の高校からの発表申込を受け付けた。公開シンポジウム「木質バイオマス利用の現状と将来」を企画した。学会企画として「林政・風致・経営,観光・レクリエーション,教育分野のあり方検討会」,「大学院進学とその後の進路の選択—どのように社会に出て行くのか—」および「論文執筆や審査の経験を共有しよう Part 2—回答書や英語論文を書いてみる—」の準備を進めた。以上を含めて大会プログラムの編成を行い,「第128回日本森林学会学術講演集」を編集した。

(8) 第129回日本森林学会大会の開催準備:応用森林学会の推薦に基づき,大会開催機関を高知大学とし,大会運営委員長(後藤純一会員,高知大学)を委嘱し,大会運営委員会を組織した。

(9) 日本森林学会各賞の選考および日本農学賞等への学会推薦:日本森林学会賞は,谷尚樹会員(国際農林水産業研究センター)の「東南アジア熱帯林の主要構成樹種であるフタバガキの花粉散布様式と繁殖特性の解明と択伐施業への応用」,岩田隆太郎会員(日本大学)の「木質昆虫学序説の出版」,大園享司会員(同志社大学)の「落葉分解菌類の多様性と分解機能に関する生態学的研究」に,日本森林学会奨励賞は,田中憲蔵会員(森林総合研究所)の「Height-related changes in leaf photosynthetic traits in diverse Bornean tropical rain forest trees」,篠原慶規会員(九州大学)の「モウソウチク林の拡大が林地の公益的機能に与える影響:総合的理解に向けて」,小松雅史会員(森林総合研究所)の「Characteristics of initial deposition and behavior of radiocesium in forest ecosystems of different locations and species affected by the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident」に,日本森林学会学生奨励賞は,東若菜会員(京都大学)の「Function and structure of leaves contributing to increasing water storage with height in the tallest *Cryptomeria japonica* trees of Japan」に,日本森林学会功績賞は,黒丸亮会員の(北海道立総合研究機構)「炭素固定能の優れたグイマツ雑種 F1「クリーンラーチ」等の開発と早期普及」に授与することを決定した。また,Journal of Forest Research 論文賞は,JFR 論文賞選考委員会が選考し,理事会で審議した結果,同誌20巻5号に掲載のIan D. Thompson「An overview of the science-policy interface among climate change, biodiversity, and terrestrial land use for production landscapes」と,21巻1号に掲載のAtsushi Tamura「Potential of soil seed banks in the ecological restoration of overgrazed floor vegetation in a cool-temperate old-growth damp forest in eastern Japan」に,日本森林学会誌論文賞は,日林誌論文賞選考委員会が選考し,理事会で審議した結果,97巻1号に掲載の平岡 裕一郎・高橋 誠・渡辺 敦史「林木育種における地上 LiDAR 計測の応用—スギ精英樹 F1 家系における樹幹形質の評価—」に,第127回日本森林学会大会学生ポスター賞

は、ポスター賞選考委員会で選考し、理事会で審議した結果、20名の学生会員に授与することを決定した。また、日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、日本農学進歩賞、日本農学会賞について、会員からの推薦を受け付け、理事会で本学会推薦業績を決定した。

(10) 学会活動の活性化: 会員拡大、ウェブサイトやメールマガジン等による広報活動、および連携学会・他学会・外部機関との連携強化を通じて、学会活動の活性化に努めた。

(11) 男女共同参画の取り組み: 2016年12月8日に、上映事業「屋久島の森に眠る人々の記憶」(主催: 林業女子会@栃木、共催: 国立歴史民俗博物館)を後援した。また、男女共同参画学協会連絡会による大規模アンケートへの回答を行った。森林学会からは229名の回答があり、学協会全体では18,159名の回答があった。

(12) JABEE(日本技術者教育認定機構)への協力: JAFEE(森林・自然環境技術者教育会)の基幹的な学会として、JABEEやJAFEEの活動・運営に協力し、関連学協会との連携を図り、森林分野の技術者教育の向上を進め、CPD(技術者継続教育)事業の推進に協力した。

(13) 連携学会(旧支部)との連携: 各連携学会(北方森林学会、東北森林科学会、関東森林学会、中部森林学会、応用森林学会、九州森林学会)大会を共催し、会長ほか役員を派遣した。また、2016年12月に第459回理事会と併せて連携学会長会議を開催し、各連携学会の活動状況と課題を共有した。

(14) 日本木材学会との連携: 「日本森林学会と日本木材学会との交流に関する覚書」に基づき、相互に理事を派遣し、また学術大会へ役員を招待した。

(15) 公開シンポジウムの開催: 第127回日本森林学会大会の公開シンポジウム「潤いのある都市をつくる森林」の報告を「森林科学」第78号に掲載した。2016年5月31日、東京・日林協会館において公開シンポジウム「森林・林業の研究―現場をダイバーシティネットワークでつなげる」を主催した。第128回大会の公開シンポジウム「木質バイオマス利用の現状と将来」を企画し、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」に応募、採択され、準備を進めた。

(16) 国際学術交流の推進: 東アジアをはじめとする諸外国との国際的学術交流を進め、2016年10月24日に日本森林学会、Korean Forest Society および Chinese Society of Forestry のそれぞれ二者間で学術交流を推進するためのMOUを締結した。2017年2月24日、Korean Forest Society が主催した国際シンポジウムに田中副会長が出席し、「日本における森林政策への研究開発の貢献」と題する講演を行った。

(17) 関連学協会への協力と社会連携の推進: 協力学術研究団体として日本学術会議に協力し、日本学術会議の会員および連携会員の候補者を推薦した。日本農学会の運営に協力し、評議員と運営委員を派遣した。日本農学会シンポジウム「山の農学―山の日から考える」(2016年10月8日、東大弥生講堂)の企画に協力し、本学会の複数の会員が講演した。防災学術連携体に参加し、シンポジウム「激甚化する台風・豪雨災害とその対策」(2016年12月1日、日本学術会議講堂)

で本学会の会員が講演した。日本木材学会および土木学会とともに「土木における木材の利用拡大に関する横断的研究会」を構成し、第7回木材利用シンポジウム「地盤改良に日本の森林資源を活かす」（2016年3月8日、土木会館）を開催した。また「土木分野における木材利用の拡大へ向けて」第2次提言の内容を検討した。科学技術振興機構からの依頼によりワークショップ「フューチャーグリーン」において本学会から報告を行った。公益財団法人 PHOENIX の研究発表支援事業に協力した。ウッドデザインサポート連絡会に参加した。第15回木材利用研究発表会（土木学会木材工学委員会）、平成28年度公開セミナー「REDD+推進に向けて：官民投資の連携」（森林総合研究所 REDD 研究開発センター）および森林関連学会合同シンポジウム「主伐を考える」（林業経済学会）をそれぞれ後援した。日本流体力学学会 2016（日本流体力学学会）、流体力学基礎講座「基礎学理から数値流体力学・流体計測の基礎と実例まで」（日本機械学会流体工学部門）および第12回バイオマス科学会議（日本エネルギー学会）をそれぞれ協賛した。

(18)国内研究機関連携の推進: 森林・林業関係試験研究機関の現状と研究推進上の課題に関するアンケート調査を実施した。

(19)各種補助金の申請: 昨年度に申請した2016年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「国際情報発信強化(B)」および「研究成果公开发表(B)」は採択されなかった。応用森林学会の発案により、公開シンポジウム「四国の竹林管理と竹材の新たな利用」(2017年11月)への助成を受けるため、日本森林学会として2017年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」に応募した。第128回大会で開催予定の公開シンポジウム「木質バイオマス利用の現状と将来」については、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」に応募し採択された。

(20)他機関等の賞、奨励金、助成金、公募等の広報および候補の推薦 ウェブサイト、メールマガジン等により会員に対して随時、情報提供を行った。

(21)学会運営の改善: 役員間や各委員間の連絡、代議員や会員へのお知らせに電子メールを活用し、会議費と通信費を節減するとともに、意思決定や情報提供の迅速化に努めた。計11回の理事会のうち7回はメール理事会によった。学会賞の選考に今回から電子投票システムを採用し、郵送料の節減と選考事務の合理化を図った。刊行物のバックナンバー保管費の節減に向けて検討を進めた。

(22)林業遺産の選定: 新たに林業遺産 No.15「若狭地域に継承された研磨炭の製炭技術」および No.16「若狭地域の里山における熊川葛の生産技術」を認定し、2016年定時総会で発表した。また会員を通じて2016年度林業遺産候補の推薦を募り、林業遺産選定委員会において審議を進めた。

(23)中等教育との連携: 第127回日本森林学会大会において第3回高校生ポスター発表を実施した。発表数は38件、参加校数は20校で、その中から最優秀賞、優秀賞および学会長特別賞をそれぞれ2件ずつに授与した。当日の概要と講評を森林科学77号に掲載した。第128回大会における第4回高校生ポスター発表の準備を進めた。

(24) 代議員および理事・監事候補選挙: 2016 年度定時総会において理事および監事を選任した。

(25) 一般社団法人としての対応: 改選に伴い, 理事・監事を修正登記した。

(26) 会員数の動向:

種 別	2013/3/1	2014/3/1	2015/3/1	2016/3/1	2017/3/1	前期との差
正 会 員	2219	2341	2443	2396	2435	+39
国内一般会員	1807	1793	1868	1822	1871	+49
a)日林誌のみ	1218	1225	1297	1279	1311	
b)+JFR	98	91	86	80	83	
c)+森林科学	233	216	222	209	215	
d)+両誌	258	261	263	254	262	
国内学生会員	386	525	561	563	553	-10
a)日林誌のみ	331	481	527	523	514	
b)+JFR	11	6	2	3	8	
c)+森林科学	19	17	11	13	10	
d)+両誌	25	21	21	24	21	
海外在住一般会員	20	15	8	4	7	+3
a)日林誌のみ	16	14	7	3	6	
b)+JFR	0	0	0	0	0	
c)+森林科学	1	0	0	0	0	
d)+両誌	3	1	1	1	1	
海外在住学生会員	6	8	6	7	4	-3
a)日林誌のみ	1	3	3	3	1	
b)+JFR	5	5	3	4	3	
c)+森林科学	0	0	0	0	0	
d)+両誌	0	0	0	0	0	
機関会員	132	127	124	114	112	-2
国内機関	127	122	119	112	110	
海外機関	5	5	5	2	2	
賛助会員	40	42	40	39	39	+/-0
合 計	2391	2510	2607	2549	2586	+37
準 会 員	249	248	251	247	229	-18